

# 後漢初頭の烏桓について

——護烏桓校尉に関する一考察——

久保 靖彦

## I

漢代周囲の弱小諸民族は、漢あるいは匈奴のいずれかに頼ることによってのみ、自身の安全を図ることが出来たのである。匈奴問題に性格づけられる漢代外交史を考える場合に、匈奴以外の諸民族が如何なる立場に立っているか、ということ忘れてはならない。言葉を換えて言えば、中国古代の外交史を彩る漢・匈奴争の渦中において、弱小諸民族はどのような役割りを果していたのであろうか、という観点に立って、兩大国間において、ある時は一方の陣營に、またある時は他方に編入せられていたところの、弱小民族の歴史を顧みる必要があるのではないであらうか、ということである。

このような着眼点に立って拙文では、烏桓が匈奴の支配を脱して漢に降り、漢が匈奴対策上から彼らを利用するに至ったのはいつ頃であらうか、という問題を明らかにしようと考えた。

この問題を考察する一視点として、漢朝が烏桓族を対匈奴策のうえから利用するにあたり、彼らを監視し援助する官として設けたところの、護烏桓校尉を採り挙げることにした。漢は、弱小諸族のうちに、対匈奴抗争の前衛軍として利用しうる力を認めた時か、あるいはまた、彼らが漢の勢力下に編入された時期にのみ、初めて新たな官職を設けて彼らを懐柔してその力を利用してのことから、護烏桓校尉設置の時期に、初めて烏桓は漢の匈奴対策の一翼を担われるようになったのであろう、という考えに至ったからである。

護烏桓校尉の設置に関して後漢書(烏桓傳)は、武帝・驃騎將軍霍去病を遣す。去病等率て匈奴の左地を破る。因りて、烏桓を上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東五郡の塞外に徙し、漢の偵と爲して匈奴の動静を察せしむ。其の大人、歳に一たび朝見す。是に於て始めて護烏桓校

尉を置く、秩二千石。節を擁して監視し、匈奴と交通するを得ざらしむ。

これに拠ると、護烏桓校尉は、武帝の治世に辺郡の塞外に移住せしめた烏桓族に対して、匈奴の動静を偵察するという役割りを与える一方、彼らが匈奴と通することのないように監視するために設けられたことになる。

換言すれば、武帝代の烏桓は、漢を援助してその匈奴政策に協力し得たのみならず、烏桓が匈奴と連合することは、当時の東北アジアに於ける漢勢力の保持に、何らかの影響を及ぼすものと漢に思わしめたほど、その力が認められていたことになる。なんとなれば、彼らが匈奴と交渉をもつ機会を与えないように、監視し懐柔する官として、護烏桓校尉が設けられていたのであるから。

三國志(卷三〇)もまた、

建武二十五年、烏丸大人軻比等九千余人、衆を率いて關に詣す。其の渠帥を封じて侯王と爲す者八十余人、塞内に居らしめ、遼東屬國・遼西・右北平・漁陽・広陽・上谷・代郡・鴈門・太原・朔方諸郡の界に布列す。種人を招来し、其の衣食を給し、校尉を置きて以て是を鎮護せしむ。

遂に漢の偵備と爲りて、匈奴・鮮卑を撃つと護烏桓校尉設置の経過とその目的を伝えている。即ち、紀元四十九年に投降した烏桓族に対処すべく設けられたのが、護烏桓校尉であり、その監視・援助の結果、烏桓族は匈

奴のみならず鮮卑さえも破り、漢に協力してその外交問題に助けとなった、というものである。

後漢書に記録され、また内田吟風博士もいわれたように——「烏桓族に関する研究」(滿蒙史)——武帝の治世に匈奴の支配を離れて漢に降り、その保護を求めた烏桓族——の一部——はあつたかも知れない、しかし、護烏桓校尉は武帝の治世に設けられたのである、というには、単に前述の記録のみではなく、それを窺わせるに足る情勢が求められなくてはならないと考える。従って、先に述べた問題点を、烏桓の動向を中心に追求し、護烏桓校尉の設置に関する前述の二史料のうち、いづれを重視すべきであらうか、という問題を考察するのが、本稿の目的であり、課題なのである。

## II

周囲の弱小諸族を支配し、彼らを勢力下に編入することによって経済的基盤の拡大を図った匈奴にとって、ラオハ河流域に部落単位で散在し、遊牧狩獵に従事していた烏桓族は、中継貿易の商品として自からに利益を与えてくれる皮革の供給源として、注目し悩める存在であった。

それ故にこそ匈奴は、冒頓單于以来、皮布裘を烏桓に課し、毎年、牛・馬・羊を徵収して、もしも、納期までに供出し得ない者があれば、その妻子は奴隸とすべく連れ去ってしまう<sup>(1)</sup>、という強圧的な態度をもって、彼等に対処していたのである。

通常、前漢代の烏桓族は、匈奴の支配を受けて、それに隷属

していたといわれるのではあるが、たゞ単に隸従して孤弱の状態を續けていたわけではなく、漢書・匈奴伝に

漢・復た匈奴の降者を得るに、言う

烏桓・嘗て先單于の家を寇く。匈奴、之を怨みて方に二

万騎を遣し、烏桓を撃たんとす、と

と記されているように、衛霍輶車士の治世——紀元前八四年——同六九年——に、それまで屈從していた匈奴に対して、初めて抵抗をこころみるようになったのである。

それはかりではなく、同車士が自から烏孫を征討した帰路に、思いもかけぬ大災害に襲われて、人民家畜は数多く凍死し、遠征軍のうち帰國し得た者が十分の一にも達し得ない状態にあった時に、

丁令・軻婁に乗じて其の北を撃ち、烏桓・其の東に入り、烏孫は其の西を撃つ。凡そ三國の殺す所数万級、馬牧万匹、牛・羊甚だ繁し。

又、重ねて以て餓死し、人民の死する者什の三、畜産は什の五、匈奴大いに虚弱にして、諸國の羈属する者皆瓦解し、攻盜も理する能わす。

という情況をもきたしたのであった。

紀元前七一年のこの事件は、烏桓族にとって非常に大きな意味をもっている、というのは、災害の力を借りたからとはいえず、「諸國羈属者皆瓦解」とあるように、匈奴に対する反革と勞働力の供出、という面で支配を受けていた彼等が、その支配を脱し独立する機会を得たからである。

同体成員の立場から脱し、烏桓部落連合を結成するに至ったのであると考えることができる。

このように、匈奴の支配から離脱し得た烏桓族は、漢・匈奴のいずれにもつかず、独自の道をあゆむことができたであろう。

夷狄の、畏れて大種に服するは其の天性なりという。弱小諸族が、強力な勢力の庇護の下に入って自國の安全を図ろうとするのは、けだし当然であり、また、それによってのみ安心を得ることができたのである。

匈奴の支配を脱した烏桓族は、匈奴の討伐を恐れたからであろうか、紀元前六〇年代の終り頃には、短い期間ではあったけれども塞を保って漢に降ったことがある<sup>10</sup>。更に

匈奴は西方に困り、烏桓の來りて塞を保つを聞き、兵の復た東方從り起るを恐る

とあるように、宣帝の元康四年——前六二——ころには、漢・匈奴抗争の渦中にまき込まれて、漢のために対匈奴戦の前衛軍となつたかのとき動向も、知られるようになったのである。

当時の烏桓が、漢の対匈奴策上から利用されて、実際に活動したかどうかは不明であるが、紀元前六〇年代末期の烏桓が、一時的とはいえ、漢に接近したことに留意したい。

前漢も末期になると、烏桓部落の内部に護烏桓使者といふ官が派遣されたことがある。烏桓を監視する役目を与えられた使者が、彼らの内部に送られていたことからみると、当時の烏桓内部には、相當に漢の勢力が浸透しており、このような漢の

今、独立という言葉を使った。それは、右の事件発生以前の烏桓族は、居住地域までも匈奴の領土として所有され、これ以後、烏桓領から匈奴が後退したのではないかと、考えるからである。即ち、匈奴諸王の分封地を述べた記録に、

諸々の左〔方〕の王將は東方に居る。上谷以東に直り、磧路・朝鮮に接す。

というものがあつた。匈奴の東部領土が磧路朝鮮と接するというこの記録から、烏桓族の領域は匈奴の領土である、と支配者たる匈奴は考へており、漢人からも、それが認められていたことを知るのである。

それ故にこそ匈奴は、本来の烏桓部族長としての地位を認めながらも、烏桓人から直接皮革を徵收して、それを、匈奴左部の諸王に獻納する匈奴部族共同体の王としての烏桓王を、設けていたのである。

また、握衍胸鞬車士が即位して二年は過ぎた、という記載に續けて、

其の明年、烏桓・匈奴の東邊を撃つ

という記録がある。紀元前五八年に、烏桓が匈奴の東方領土の一部を撃つたということは、当時の烏桓族がすでに匈奴領外に居たことを物語り、そして匈奴は、その頃には旧来の烏桓領土から撤退していた、ということを知れるわけである。

詳して烏桓族は、冒頓車士以来の被支配者としての立場から、紀元前七一年の事件を直接の契機として独立し、紀元前一世紀の後半には、彼らをも含めて構成されていた匈奴國家の部族共

烏桓に対する接近は、軍事的に烏桓の勢力を対匈奴策上に利用し得るものと考えたようになつたからであらうと思う。

烏桓の存在をそのように認識したからこそ王莽は、烏桓の兵力を代郡に招平して、事を以て兵を制するといふ常套手段を、匈奴討伐に際して行なおうとするに至つたのである。

王莽篡位の直前に、再び匈奴の経済的支配に抗した烏桓族が、匈奴の討伐に參つて敗北し漢に援助を求めたことから、王莽の烏桓利用という政策が生みだされたものではあるが、その時烏桓は、完全に王莽の勢力下に編入されて、長くその支配にあまなじていたのではなかった。

彼ら烏桓族は、諸郡に駐屯せしめられる苦しみから逃れるために、帰國を願ひだしていたのであるが、しかし王莽の強い拒絶にあつて遂に塞外に走り、漢土の北邊を侵すようにまでなつたのである。

これに対して王莽は、すでに入賢せしめていた多くの烏桓人を殺害し、ここに、宣帝以来、ほそほそではあったが續いていた漢と烏桓の友好関係は崩れて、烏桓族の対華感情は悪化するのである。

一方、匈奴はこの好機をとらえて、

其の豪帥を誘いて以て更と爲し、余は皆、羈縻して之を属せしむ

というように、彼らを再び勢力圏内に編入してしまつたのである。

前漢代の北アジア外交史は、漢と匈奴の二大勢力を中心に動

いており、漢・匈奴の両者とも、自からの優位を保つために、周囲の弱小諸族をその勢力下に編入する努力を怠らなかつたことは、周知の事実なのである。

しかし、武帝以後の漢・匈奴抗争の中心が、西域の争奪であったが故に、漢がオアシス諸國を編入する際にみせたような努力を、漢にとっては経済的な価値も少ないラオハ河流域の烏桓族に對してはせず、王莽が実權を握るまで、さして注目を及ぼさなかつたことは、理解出来るのであり、一方匈奴が、對漢政策上から彼らを利用したのではなくとも、商品としての皮革及び奴隸の供給源として、いちはやく烏桓族をその支配下に置いていたことは自明の事実なのである。

しかし、その烏桓支配は、既に述べたように、紀元前七〇年代に一応の終結をみ、後漢初頭の時期には新しい關係が、匈奴と烏桓の間に生れてくるのである。

### III

王莽の勢力下から匈奴に走った烏桓人を、呼都而尸道單于が日逐王比の監督下においたことは、比に、匈奴の『南辺及び烏桓を都領』せしめていたことから窺うことができる。

兩漢交代期から後漢初頭に於ける匈奴と烏桓には、前漢代にはみられなかつた新しい動きが現われてくる。そして、その新しい動きこそ、兩者の間に芽生えた連合の形態として、とらえることができるのである。

新末より後漢の初めにかけての群雄が、匈奴及び烏桓の力を

というように、匈奴は、羌族との連合關係樹立に努めていたことが分る。<sup>(26)</sup>

このような羌族との連合の目的は、経済的に重要な西域の確保を、漢の西方への通路を遮断することによって図ろうとするものであつたことは、改めていうまでもないであろう。

しかし、このような羌族に対する連合への働きかけは、神爵二年——紀元前六〇——に多數の羌族が降服し、その年の秋に日逐王先賢揮が降り、匈奴に混乱がみられるに及ぶと、遂に不成功に終るのである。

匈奴の烏桓との連合は、羌族とのそれのように、明白な政治的目的をもつたものではなかつたが、後漢初頭に於ける匈奴と烏桓との關係は、匈奴が烏桓族を、自分達と對等の立場に立つものとして認めるに至つたことを示すものではないであろうか、というのも、日逐王比に「都領」されて、匈奴に従属してその勢力下に編入せられてゐるのであるならば、記録に、匈奴と烏桓、という二つの勢力を併記する必要はなく、先に述べた如く、烏桓が匈奴國の構成分子の一つであつた時期の記録のように、「匈奴」という言葉に含めて記載すればよいのであるから。

また、匈奴と烏桓を区別した記録が残されたということは、後漢初頭の烏桓勢力に對して、中國側の関心が強まってきたことをも示しているのである。

事実、當時の中國では、後に述べるように、日逐王比の投降のみによって北邊に平和が訪れたわけではなく、それに続いて烏桓族が降服したときにはじめて、漢人をして「北邊無事なり」<sup>(27)</sup>

借りて割拠した事実や、叛將盧芳が紀元三〇年に、匈奴のみならず烏桓の兵を率いて後漢の辺害を成した、という記録が、匈奴・烏桓連合の初期の姿を明示するものである。

しかし、匈奴・烏桓連合は、匈奴が中國北邊に侵入して、経済的目的から掠奪行為を行なう際に烏桓の兵力を利用する軍事的同盟關係が、その主目的であつたと考えられるのであるが、そのような動向は、記録には光武帝の即位以後に散見するのみである。<sup>(22)</sup>

鄧支單于が、唐居の兵を利用して烏孫討伐を行なつた例を引くまでもなく、匈奴はその對外關係を有利に導ぶために、異民族の力を借りる努力を行なつていたのである。

武帝の河西四郡設置によつて、その關係を断たれた羌族に對しても、匈奴の同盟關係樹立への努力は続けられていた。

宣帝の元康四年——紀元前六二——に、狼何なる一種族が、使いを遣わして匈奴に至り、兵を籍りて鄯善・敦煌を撃ちて以て漢道を絶たんと欲したことがある。これは、趙充國も語っているように、<sup>(24)</sup> 弱小種族の棄案ではなく、匈奴の働きかけによつて計画された事件である、と考えるのが妥当であろう。そのように考えてみると、羌族の内部には、當時漢の巡視官が送られていたのみではなく、匈奴の使者も潛入して、羌族を對漢政策の上から利用すべく活動していたことを知り得るのであり、そしてまた、匈奴・數々羌人を誘い、之と共に張掖・酒泉の地を撃ちて羌をして之に居らしめんと欲す

と安堵の言をいわしめたように、後漢にとっては、匈奴とも

に、新たに烏桓に對処する必要が生じたことを知るのである。更に

是れ自り匈奴衰弱し邊に寇警無し。鮮卑・烏桓並ひ入りて朝貢す。<sup>(30)</sup>

時に南單于臣を称す。烏桓・鮮卑並ひ來りて入朝す。<sup>(31)</sup> という記録をみると、後漢初頭の匈奴の盛衰が、その同盟者たる烏桓に与える影響もまた、大なるものであつたことを窺うことができるであろう。

従つて、これまでみてきたように、兩漢交代期から後漢の初頭に於ける匈奴と烏桓の關係は、前漢代の如き支配・被支配の關係ではなく、より對等の立場に立つた同盟關係とみることができ、その活動の姿を、匈奴・烏桓連合の形態として、とらえることができるのである。

### IV

匈奴・烏桓連合は、この後、二世紀前半に至るまで現われてこない。従つて今後は、匈奴・烏桓・後漢の三者の關係から、連合の一時的終局をもたらしした原因と、それに対する後漢の對策に就て考えてゆかなくてはならないであろう。

後漢初頭の匈奴は、再び單于位繼承問題が表面化し、政治的に衰微への第一歩を踏みだした時期に當り、その上

連年旱蝗赤地數千里

草木亦尽枯れて、人畜の大半は飢えたり疫病にかかつて死

(33) んでゆく、といわれるような大災害が続き、その経済的基盤にも動搖の色がみえていた。

このような情況の下に日逐王比は、五原の塞を歿き、永く藩蔽と為りて北虜を扞禦せんことを願ひ

(34) 出て、建武二十四年——紀元四八——に後漢に降り、こゝに、匈奴は再び分裂するに至るのである。

この、日逐王比の投降、という事件に関連したかのように、翌年には烏桓族の投降という事実が生れている。それは、

建武二十五年、烏丸の大人郝且等九千余人、衆を率いて關に詣す。その渠帥を封じて侯王と為す者八十余人。塞内に居らしめ、遼東・遼西・右北平・漁陽・玄菟・代郡・鴈門・太原・朔方諸郡の界に布列す。

種人を招来してその衣食を給し、校尉を置きて以て之を領護せしむ。遂に漢の領備と為して匈奴・鮮卑を撃たしむというものである。(35)

先に、この紀元四九年の、郝且を代表とする烏桓族の投降を、日逐王比の出入と関連したかのように、といった。それは、

王莽の末、「烏桓」並びて匈奴と寇を為す

という例を引くまでもなく、匈奴と烏桓は同盟關係にあって連合を形成し、そのうえ、日逐王比は匈奴の南部を領護し、それ故に烏桓を指揮していたという關係から、匈奴・烏桓連合の主体は、日逐王比を中心とする匈奴と、郝且を中心とする烏桓であり、政治的不満から降った比による何等かの働きかけが

烏桓に対してなされたか、あるいは、事實上匈奴国内の秩序を裏切った比と關係の深かった烏桓が、北匈奴の報復を恐れたかして——おそらくはその両方の原因によって——日逐王比の後を追って投降したのではないであらうか、と考えるからである。

そして、その後、「匈奴・烏桓、兵を連れねて邊を寇す」というような記録が、二世紀前半に至るまでみられないのは、両者が相次いで投降した事実こそが、匈奴・烏桓連合の一時的終結をもたらす契機となった事件であったからであらう。

後漢にとって、その北匈奴対策上から彼らを利用し得る、という点では有利な事件であったこの両者の相次ぐ投降は、他方、彼らを援助するのみではなく監視する必要をも、生ぜしめたのであった。何となれば、彼らは度々北邊に侵入し、同盟關係を結んでいたのであるから。

後漢は、南匈奴及び烏桓を監視しかつ援助する官として、前者には使匈奴中郎將を、後者には護烏桓校尉を設置して、そのことにあたられた。

建武二十六年——紀元五〇——に、北匈奴の追撃を恐れた南匈奴は、後漢の保護を求めて塞内に移り住み、これに対して後漢は、

始めて使匈奴中郎將を置く。兵を將いて之を衛護せしむ

とあるように、使匈奴中郎將を設けて、彼らを軍事的に援助し、そのうえ既に先人が、使匈奴中郎將は

或いは護匈奴中郎將と称す

(38) と指摘されたことから考えると、この「護」は、註(14)に示したように、「監視」の意味であるから、南匈奴を監視する役割りをも持っていたのであろう。

後漢はまた、塞内への人居を許した烏桓族に対し、「漢の領備と為して匈奴・鮮卑を撃たしめ」る役目を与えたのみではなく、班彪の、

烏桓は天性輕黠にして好みて寇賊を為す。若し久しく放縱して而して總領する者無くば、必らず復た居人を侵掠せん。但た主降掾吏に委ぬるは、能く制する所に非ざるを恐る。

軍愚、以為、宜しく復た烏桓校尉を置かば、誠に付策に益有りて國家の迎應を有かん

(40) という上言に従って、南匈奴に使匈奴中郎將を設けたように、「主烏桓胡」という役職を持った護烏桓校尉を置いて、烏桓族の指揮監督にあたれたのであった。

従って、両者の投降を契機として、匈奴・烏桓連合が約半世紀間に及ぶ一時的な終結をみせた原因は、使匈奴中郎將と護烏桓校尉による監視の徹底、言葉を換えていえば、南匈奴及び烏桓に対する後漢の政策の成功、という点に求めることが出来るのである。

## V

護烏桓校尉の設置について三国志は、前述の如く、光武帝の時に降った烏桓族に対すべくこれを設けたのである、と記述している。一方後漢書は、

武帝・驃騎將軍霍去病を遣す。「霍」去病撃ちて匈奴の左地を破る。因りて烏桓を、上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東の五郡の塞外に徙し、漢の領と為して匈奴の動靜を察せしむ。

其の大人、歲に一たび朝見す。是に於て始めて護烏桓校尉を置く。秩二千石。節を擁して監領し、匈奴と交通するを得ざらしむ。

(41) と護烏桓校尉の設置について述べている。

匈奴と烏桓の相次ぐ投降に対処すべく設けられた二つの官職のうち、使匈奴中郎將には問題はない。しかし護烏桓校尉に関しては、それが設けられた時期に就いて疑問が残るのである。

趙翼は、後漢書と三国志には、種々記述を異にする例はあるが、それは各々根拠のあることであるから、その両説は共存すべきである。といっている。(42) しかし、護烏桓校尉設置の時期に就いての二説は、両存することが許されるであらうか。否。

従って新たな考察の対象は、護烏桓校尉は如何なる情況の下でいつ新設されたのであろうか、という問題なのである。

護烏桓校尉設置の時期を明らかにすることは、たゞ單に、烏桓族に対処するという役職を持った官が設けられたのはいつであらうか、という点に留まるのではなく、烏桓族が、対匈奴策上から中国に利用されるに至ったのはいつごろであらうか、という点にあるのである。それは、更に言葉を換えていうならば、烏桓が匈奴の支配を脱し、中国の勢力圈内に編入されるという情勢が生れた時を、前漢・後漢のいずれに求むべきか、とい

う問題なのである。

後漢書の記録に拠ると、護烏桓校尉は、前漢武帝の時に將軍霍去病が匈奴の東方領土を破つたので、当地に散在して匈奴に從属していた烏桓族を、中国東北諸郡の塞外に移住せしめ、漢のために匈奴に対する偵察を行なわせた。そこで、帰順した烏桓族に対して、彼らが匈奴と内通することを防ぎ監督するために設けられたのである。ということになる。

〔霍〕去病・撃ちて匈奴の左地を破る

という事件は、武帝の元狩四年——紀元前一九九——のことであるから、後漢書烏桓伝が記すように、右の事件をもって護烏桓校尉設置の動機と考えるならば、護烏桓校尉は、この年に設けられたことになるのである。

この記録が証明されるかどうか、しばらく前漢と烏桓との關係からそれを見てみたい。

両者の政治的關係を示す史料を漢書に求めると、次に引く二例が、その初出のものであることを知る。即ち、

遼東烏桓反す。中郎將范明友を以て遼東將軍と爲し、北

辺七郡の二千騎に將として之を撃たしむ。<sup>(43)</sup>

烏桓復た塞を犯す。遼東將軍范明友を遣わして之を撃たしむ。<sup>(44)</sup>

という記載である。

これに拠ると、紀元前七八年に、烏桓族は初めて漢の辺郡に侵入して敵對行動を起したことが分るのである。

前記の例に、「遼東烏桓反」と記されている遼東烏桓は、遼

東郡内に移住していた烏桓族<sup>(45)</sup>、という意味ではなく、既に先哲が指摘されたように、「遼東郡塞外に散居していた烏桓族」の意味であろう。

更にこの「遼東烏桓」が、漢書には記されておらず、後漢書にのみ伝えられているところの、武帝代に五郡塞外に移居せしめた烏桓族のうちの、遼東郡塞外に居住を許されたものである、と考えるのも早計にすぎるのではないであろうか。

何となれば、漢書に見えるこの「遼東烏桓」が、もしも、後漢書の伝える烏桓族のことであるならば、彼らに対処すべく設けられたと後漢書が述べている護烏桓校尉は、一体、何をしていたのであるうか、という疑問を抱くからである。

遼東將軍という官名は、文字通り、遼河を渡って外征する將軍に冠せられたものである。こゝで見落すことの出来ない事實は、前引の例に

中郎將范明友を以て遼東將軍と爲す

と記録されているように、紀元前七八年に、遼東塞外の烏桓族が遼東の漢人に損傷を与えた事件に対して、

遼水を度り、往きて烏桓胡を撃つ

と伝えられているように、烏桓族に対処すべき役目を与えられた官が新設された、ということである。

もしも、後漢書烏桓伝が記すように、紀元前一一九年に、中国東北諸郡の塞外に移居せしめたところの烏桓族があり、それを監視する官として護烏桓校尉が設けられていたのであるならば、前七八年の事件に対して、当然、何らかの活動を行なった

であろうと思われるにも拘わらず、史実は、この事件に対処すべく、新たに、「烏桓胡を撃つ」という役割りを持ったところの遼東將軍という官を、設置したことを教えているのである。

武帝の時に設けられた長水校尉は、胡騎校尉などと共に、投降した異民族の兵士を支配統率していた官である。

もっとも、長水校尉は、長水・宣曲の胡騎を掌どっていたのであるから、後漢書に見える辺郡の塞外に居住を許された烏桓族に対処していたとは、考えられないのであるが、内附烏桓の兵士をその配下に持っていたことは事實である。

しかしこの官は、元來、投降した匈奴の騎兵を統率して長安付近に屯した禁衛兵の隊長であったので、烏桓族の一部が彼の下に兵士として編入された、という応劭の記述は、おそらくは烏桓が中国に降り、恭順の意を表するに至った後漢の頃のことを述べているのであろう。

宣帝代の烏桓が、匈奴から離れ前漢に近ずいたと思われる情勢については、先に述べた。そして当時、漢が匈奴から独立した烏桓を、実際に匈奴策士に利用したかどうか不明である、ということについても触れた。いわんや護烏桓校尉の活動、またその存在を窺わせるような情勢は、宣帝代にも見出し得ないのである。

漢の積極的な烏桓懷柔は、護烏桓使者が設けられた前漢末期から王莽の時期に、初めて行なわれたのである。

護烏桓使者は、烏桓部落に派遣されて、彼らの動靜を監視していた官であろう。彼が烏桓の人民に、

復た匈奴に皮布糲を与うるを得せしむる毋れと告げ<sup>(50)</sup>、その告示が原因で烏桓は匈奴と争い、そして敗北した後、一時は王莽にその力を利用されるに至るのであるが、前漢末に烏桓の動靜を監視して強い影響を彼らに及ぼしていた官吏は、護烏桓校尉ではなく、護烏桓使者なのであった。<sup>(51)</sup>

#### IV

護烏桓校尉と同じような役目を持って異民族に対処すべく設けられたものに、護羌校尉がある。

これについて応劭は、

武帝置く、秩は比二千石、節を持して以て西羌を護ると、護羌校尉は前漢武帝の時に設けられたと述べている。<sup>(52)</sup>

王先賢もまた、

武帝の時、諸羌寇を爲し、叛服常なし。乃ち校尉を置く。節を持して降羌を護る

と応劭の漢官儀と同じように、その設置を武帝の治世に求めている。<sup>(53)</sup>

なるほど武帝の時には河西を領有し、匈奴と羌族との關係を断つたのであるから、もしその時羌が服属してきたのであるならば、羌族に対処すべき官を設けるべき情勢はあったかも知れない。しかし護羌校尉は、武帝の時に設けられたものではなかった。

先にも述べたように、紀元前六〇年代末期の羌族は、一部漢に和親の態度を採る部落もあったが、或るものは湟水北岸の沃野

に移って付近の漢人を苦しめ、その上、匈奴との連合關係樹立を図っていたのである。

このような情勢のもとに漢に降った羌族に対し、宣帝は金城属国を設けて衣食を支給し、外敵防衛の任に当らせていたのである。そして既に述べたように、金城属国が設けられた年に日逐王先賢犂が投降し、金城郡付近まで南下してきたころ、宣帝は、詔して護羌校尉を設置したのである。<sup>54)</sup>

漢代の校尉——今は、弱小民族に対して、彼らを監視し援助すべく設けられた屯田兵の隊長としての校尉についてである——は、漢朝が弱小民族のうちに、対匈奴策上に利用し得る力を認めた時か、或いはまた、彼らが漢の勢力圏内に編入された時期にのみ、彼らを懐柔してその力を利用するために設けられたのである、という考えを持っている。

紀元前六〇年代末の羌族には、属国が形成されて漢の支配は徹底し、匈奴と結んで漢の西方への通路を遮断する危険は除かれたように思えるのであるが、叛服常ないのが遊牧民族の特性であることを想起し、当時、金城郡付近に散在する羌族の遊牧地域に、降服して来たとはいえ、匈奴王族の部衆が大挙して南下していることを知れば、漢が、この情勢に対して、新たな策を施さざるを得なかったことは明らかであり、その求めに応じて、宣帝が護羌校尉を設けたことは、漢書に伝えられる通りなのである。

従って、応劭・漢官儀に伝えられた記録と、それに典拠を求めて記されたと思われる後漢書西羌伝の、武帝の時に

前に述べた如く後漢初頭の匈奴では、天災相次いでその経済基盤を動揺せしめ、政治的にも、継承問題に關して日逐王比の投降を招いたように、国内は乱れ、その遊牧国家は弱体化への第一歩を踏み出していたのである。

このような匈奴の弱体化がみられた時期に、後漢に降って塞内に居住を許されたのが、鄯且らを代表とする烏桓族であった。彼らは、武帝代の烏桓のように、匈奴に隷属した被支配民族ではなく、匈奴と同等の立場に立つて連合を形成し、しばしば辺境に侵入を行なって中国を苦しめ、班彪をして

若し久しく放縱して而して總領する者無くば、必ず復た唐人を侵掠せん

といわしめたように、北アジアの新勢力として、後漢の新たな問題となっていたのである。

このような關係を考へるならば、建武二五年（紀元四九）に投降した烏桓族に対して、「漢の偵備と爲して匈奴・鮮卑を撃たしめ」る役目を与えたのみでなく、前衛軍として彼らを利用する価値を認めた後漢が、

烏桓は天性輕黠にして好みて寇賊を爲す。若し久しく放縱して而して總領する者無くば、必ず復た唐人を侵掠せん。但だ主降豫吏に委めるは、能く制する所に非ざるを恐る。

臣愚以爲らく、宜しく復た烏桓校尉を置かば、誠に附集に益ありて國家の辺慮を省かん  
という班彪の<sup>(55)</sup>上言に従って、光武帝が、新たな官職を設けて彼らを指揮監督する必要を認めるに至ったことは、宛うに十分な

漢・將軍李息、郎中令徐自を遣わし、兵十万人の料と爲して撃ちて之を平ぐ、始めて護羌校尉を置く。持節統領せしむ

という記載は、誤りであると考えることが出来るのである。

#### IV

応劭の漢官儀には、

護烏桓校尉・孝武帝の時、烏桓漢に属す。始めて幽州に之を置く。擁節監領し秩は比二千石

という記載がある。

後漢書もこれと同じように、護烏桓校尉は前漢武帝の時に設けられたといっている。

しかし漢書には、これが前漢代に置かれたという記述がないばかりでなく、武帝代の匈奴は、その経済的基盤も未だ固く、單于の下に統制のとれた遊牧国家としての体制を堅持して、十分に漢に抗し得る力を備えていたのであり、一方當時の烏桓は、匈奴に隷属してその支配を受け、それに抗し得るような力を持つてはいなかったことを想起すれば、烏桓に対して

<sup>(56)</sup>匈奴と交通するを得ざらしむる

ために、新たに校尉を設けて彼らを監視する必要が武帝の治世に存在した、と考えることは出来ないのである。<sup>(56)</sup>

従って、応劭に拠ったと考えられる後漢書烏桓伝の、護烏桓校尉設置に關する記載は、護羌校尉について述べた記録と同じように、誤り伝えられたものと考えることが出来るであろう。

のである。

そして、その要求に答へるべく設置されたのが、護烏桓校尉なのである。

従って、護烏桓校尉設置の時期、即ち、烏桓が匈奴の支配を脱し、中国の勢力圏内に編入されてその力を利用されるという情勢が生れた時は、前漢交代期以来勢力を拡大し始めた烏桓が、大挙して来り援助を求めた後漢初頭であったことを知る。

そしてまた、烏桓を利用する目的が、北匈奴に対する前衛軍として、南匈奴と共に活用する点にあるのであるから、南匈奴と同盟關係を持っていた烏桓族に対してのみ、利用価値があったのである。

その上、投降以前の匈奴と烏桓は連合していたのであるから、烏桓が南匈奴と結んで辺害を行なわないように監視する必要もまた、生じていたことはいうまでもないであろう。

前漢代の烏桓が、漢と匈奴に対していかなる立場に立っていたか、ということを理解したうえで以上のように考えてみると、護烏桓校尉は、後漢書のように前漢武帝の治世ではなく、三國志が語るように後漢光武帝の時に投降した烏桓族の

種人を招来し其の衣食を給するのみならず、

漢の偵と爲して匈奴・鮮卑を撃たしめ  
のために、彼らを援助し、また監視する官として設けられたものである、と考えられるのである。

## VIII

冒頓單于によって、匈奴の被支配部族に編入された烏桓は、しかし前七〇年代末期にはその支配を脱し、漢に対しても、侵入・掠奪という形で、経済的な関係をもつようになった。政治的に彼らは、宣帝以来漢に近すぎ、王莽の頃には新に親しみ、匈奴対策上にその力を貸したようではあるが長続きせず、王莽から逃れて匈奴に走ったのである。

前漢交代期の烏桓は、前漢代には見られなかった新しい関係を、匈奴と結んだ。

それこそ、軍事同盟を結んだ匈奴と烏桓が、中国辺境に侵入して戦斗的な交易を行うという経済的な目的をもった関係である。

より対等の立場に立ったこの両者の新しい関係を、匈奴と烏桓が連合した形態として与えることが出来る。

しかしこの連合は、同盟の主体であった日逐王比と、郝且らを代表とする烏桓が相次いで後漢に降ることによって、一時的な終結をみせる。

両者が相次いで降った、ということは、連合の崩壊を意味するものではない。何となれば、同盟関係を結んで連合していたからこそ、烏桓は日逐王比に続いて降服し、後漢に援助を求めたのであるから。

しかし、その後、連合関係が二世紀初頭に至るまでみられな

い原因は、塞内に移住を許した南匈奴に対して使匈奴中郎将を置いたように、内属した烏桓に対処すべく護烏桓校尉を設けたからなのである。

この護烏桓校尉は、それが設けられなくてはならないような情勢になかった前漢武帝の時にはなく、烏桓を放置しておくことは危険であり、彼らを監視し利用する必要がある時期、即ち後漢光武帝の治世に設けられたのであった。

従って、護烏桓・護羌・戊己各校尉の設置年代を、事実より古く考えようとする後漢書の記載についても、これを盲信することは出来ないということを知ったのである。

一九六三・六・一〇

## 註

(1) 三国志(魏志)・卷三〇・烏丸伝

其の先、匈奴の破る所となりてより後、人衆孤弱にして匈奴に臣服を為す、常に牛・馬・羊を歳輸し、時適くるも具わらざれば、軋ち、其の妻子を虜せらる。

(2) 馬長方氏は、前漢代の烏桓部落は、匈奴社会への奴隸供給を行なう義務をも加せられていた、と説いておられる。

「論匈奴部落国家的奴隸制」一一一―一二頁。歴史研究・一九五四年・第五期。

(3) 三国志・卷三〇・烏丸伝は、同じ事件を

匈奴・衛術單于の時に至り、烏丸軋た強く、匈奴單于の家を差掘し、冒頓單于に破られし所の恥を報ずと云えてゐる。

(4) 漢書・卷九四・匈奴伝上。

(5) 資治通鑑・卷二四・漢紀十六に拠った。

(6) 漢書・卷九四・匈奴伝。

(7) 護雅夫博士「匈奴の国家」―その予備的考察― 史学雑誌五九・五。

(8) 漢書・卷九四・匈奴伝。

(9) 漢書・卷七〇・陳湯伝。

(10) 後漢書・卷九〇・烏桓伝。

(11) 宣帝の時、「烏桓」乃ち稍塞を保ちて降附す

(12) 漢書・卷六九・趙充国伝。

(13) 資治通鑑・卷二五・漢紀十七に拠った。

(14) 漢書・卷九四・匈奴伝。

(15) 漢書・卷五四・李広伝の

自馬の将有り、出でて兵を護る

という文中の「護」に、顔師古は「護は之を監視するを謂う」と註している。

(16) 後漢書・卷九〇・烏桓伝。

(17) 後漢書・卷一一九・南匈奴伝。

(18) 後漢書・卷九・耿种伝。

(19) 後漢書・卷九・耿种伝。

(20) 張舉・城に拠りて反畔す。乃ち招きて匈奴・烏桓を迎

え、以て援助と為す。

(21) 後漢書・卷二〇・王霸伝。

〔建武〕十三年、盧芳、匈奴・烏桓と兵を連ね、寇盜すること尤し、数々縁辺愁苦す。

(22) 後漢書・卷二〇・祭彤伝。

是時にあたり、匈奴・鮮卑及び赤山烏桓、連和して強盛なり、数々塞に入りて吏人を殺略す。

朝廷は以て憂と為し、益々縁辺の兵を増す。

〔補註〕記録的には、当時の匈奴・烏桓連合の活動は註(20)から(22)に引いた例のみではあるが、実際には、前漢交臂期の混乱を利用して、しばしば辺害をなしていたであろう。

(23) 漢書・卷七〇・陳湯伝

鄯支・数々兵を借りて烏孫を撃つ

(24) 漢書・卷六九・趙充国伝。

(25) 右に同じ。

〔趙〕充国以為、狼何は小月氏種、陽關の西南に在り。

〔その〕勢、独り此の計を造る能はず。旋う、匈奴の使、

已に羌中に至るを。

(26) 註(24)に同じ。

(27) 漢書・卷八・宣帝紀。

〔神爵二年〕夏五月、羌虜降り服す、其の惡大豪楊玉・

僮非首の首を斬る。金城属国を置きて以て降羌に処す

(28) 右に同じ

〔神爵二年〕秋、匈奴の日逐王先賢掸、人衆万余を携いて来り降る。

(29) 後漢書・卷二〇・王綱伝。

(30) 後漢書・卷二〇・祭彤伝。

(31) 後漢書・卷二六・趙壹伝。

(32) 一、後漢書・卷四七・班超伝。

〔永初〕三年冬、南单于・烏桓太人と俱に反す

二、同書・卷六四・趙岐伝

会々南匈奴・烏桓・鮮卑と反叛す

三、同書・卷六五・張奐伝

鮮卑・〔張〕奐の去るを聞き、其の夏遂に南匈奴・烏桓と結び数道より塞に入る

以上は一〇九年から一六六年までに行なわれた連合の動きであるが、二世紀中葉に至るまで、彼らの連合が見られるのは、兩漢交替期以来の關係が、何等かの形で継承されたからであろう。

(33) 後漢書・卷一九・南匈奴伝。

(34) 右に同じ。

(35) 三国志・卷三〇・烏丸伝所引魏書。

(36) 右に同じ。

(37) 後漢書・卷一・光武帝紀。

(38) 王先賢・後漢書集解。

(39) 三国志・卷三〇・烏丸伝。

(40) 後漢書・卷九〇・烏桓伝。

(41) 右に同じ。

(42) 趙翼・廿二史劄記・卷六「後漢書三国志書法不同処」。

(43) 漢書・卷七・昭帝紀、元鳳三年の条。

尚、史記・卷二二、「漢興以来将相名臣年表」第十・元鳳三年の項にも、

十二月庚寅、中郎将范明友、為度遼將軍、擊烏丸とある。

(44) 同右、元鳳六年の条。

前出の史記年表第十・元鳳六年の項には

九月庚寅、衛尉・平陵侯范明友、為度遼將軍、擊烏丸とあり、漢書天文志には、

其〔元鳳〕六年二月、度遼將軍范明友、擊烏桓還とみえる。昭帝の前七五年には、前後二回の烏桓討伐が、度遼將軍によって行なわれたのであろう。

(45) 津田左右吉博士「遼東属国の性質に就きて」・史学雑誌二五の一〇。

(46) 応劭「漢官儀」孫星衍校集本。

(47) 漢書・卷一九・百官公卿表上。

長水校尉は、長水・宣曲の胡騎を掌さざる

(48) 応劭「漢官」・孫星衍校集本。

長水校尉・員吏百五十七人。烏桓胡騎七百三十六人。

(49) 手塚隆義教授「前漢の投降胡騎に就いて」蒙古・第二号。

(50) 漢書・卷九四・匈奴伝下。

(51) 胡三省は、通鑑に「護烏桓使者即護烏桓校尉」と註しているが、論拠不明である。その上護烏桓使者は、校尉の部下であったとも考えられない。それは筆者が、前漢代に護烏桓校尉は設けられていなかった、と考えるからばかりでなく、後漢書百官志に

護烏桓校尉一人、比二千石。本注に曰く、烏桓胡を主とすると

とあり、その註に

応劭漢官に曰く、擁節。長史一人、司馬二人、皆六百石とみえ、使者については何も伝えていないからである。

(52) 応劭「漢官儀」。後漢書・卷一・光武帝紀所引。

(53) 王先賢「後漢書集解」。

(54) 漢書・卷六九・趙充国伝。

(55) 後漢書・卷九〇・烏桓伝。

(56) 當時、匈奴の支配を離れて漢に降った烏桓族の一部はあったかも知れない。しかし、その当時の烏桓族に対し、彼らを監視する官を設けなくてはならない条件があったとは思われない。

もし、武帝代に降った烏桓があり、彼らに対処すべく護烏桓校尉が設けられていたのであるならば、何故、昭帝の時に起きた事件に対して、何らの活動も行っていないのであろうか。

疑いを抱く所以である。

(57) 後漢書・卷九〇・烏桓伝。

(58) 三国志・卷三〇・烏丸伝。

(59) 「復」という文字に注目して読むと、班彪は、再び護烏桓校尉を設けるべきである、といっているかの如く考えられる。烏桓伝は、本論に引いた班彪の言葉に続けて、帝從之。於是始復置校尉於上谷密城。開營府并領鮮卑。官賜符予歲時三〔胡〕市焉と記している。

「始」は「初」で、「復」は「再」である。「始メテ復タ校尉ヲ上谷密城ニ置ク」とはどういう意味であろうか。

「護烏桓校尉は前漢武帝の時に設けられた」と先に記した烏桓伝の記者は、その説が正しいのであるならば、「宣復置烏桓校尉」という文に続けて「於是復置校尉」と記載すれば、「かつて一度設けられた護烏桓校尉を再び設置すべきである」という班彪の言を受けて、「是に於て再び校尉が設けられたのである」と続き、何の疑問もなく受け入れられるはずであるにも拘わらず、「光武帝の時に初めて設けられた」のか、「光武帝の時に再び設けられた」のか、どうにも釈然としない伝文を残している。

釈然としないといったが、武帝の時に設けられたのが事実であるならば、「始」という文字を記入する必要はないのである。

あえて武帝の治世に設置されたという記録が漢書に見え



ない、ということに言及するまでもなく、この後漢書烏桓伝の「復」という文字の意味に拘泥する必要はないと思う。

同じような例を引こう、後漢書西域伝に、

元帝又置戊巳校尉屯田於車師前王庭

という記載がある。この文中の「又」は、「復」と同義である。これをそのまま信用すると、「元帝は、再び戊校尉と己校尉を設けて、車師前王の居城にそれを置いた。」ということになる。

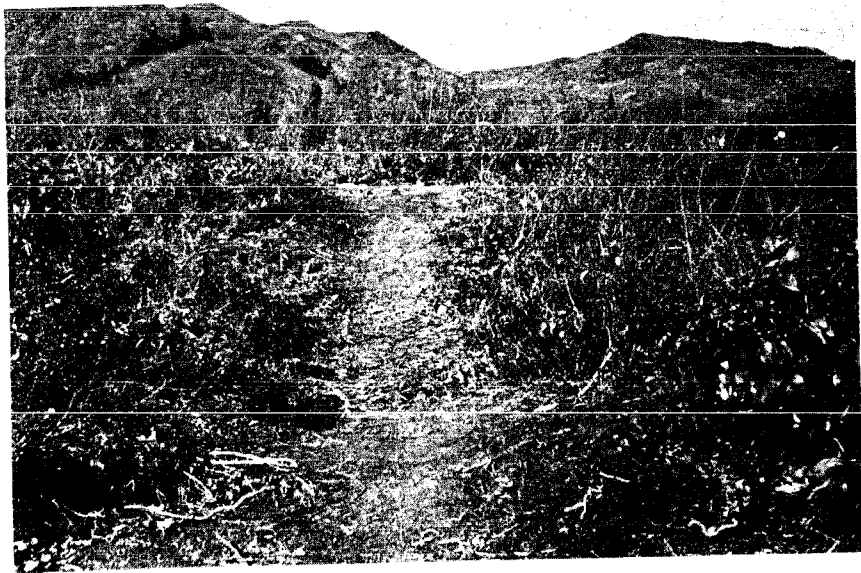
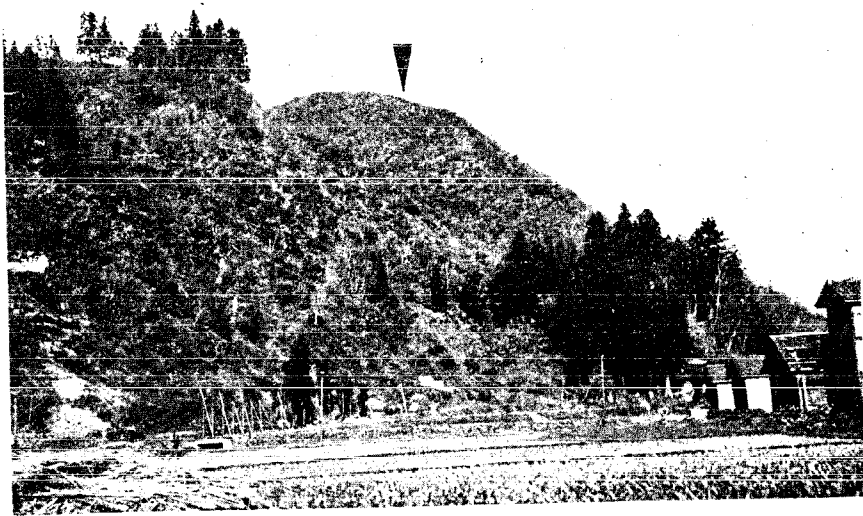
戊己校尉について、今は詳述する機会ではないが、戊己校尉が戊校尉・己校尉に分れるのは、舊唐の北匈奴討伐以後である、という考えをもっている。その上、漢書百官公卿表には

戊己校尉、元帝初元元年置

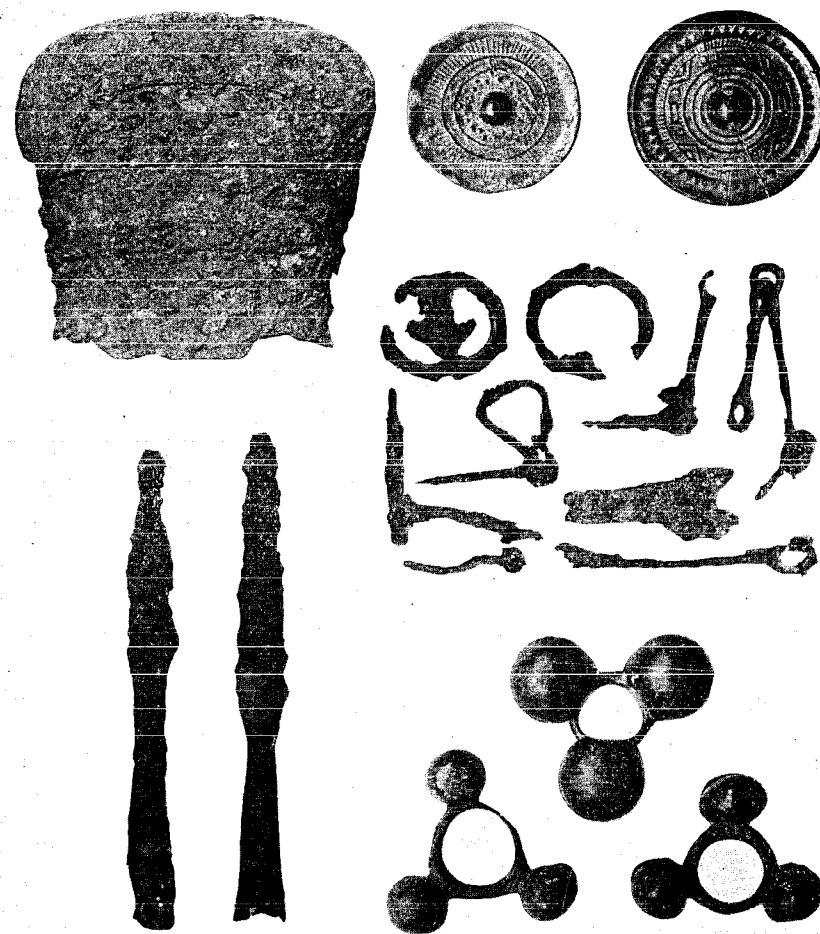
と、それが元帝の世、紀元前四九年に初置された、という明文が残されているのである。

従って、戊己校尉に関する記録の「又」が誤りであり、本論中に述べた護羌校尉についての記載も、誤り伝えられたものであったことを想起すれば、烏桓伝中の、「復置校尉」の「復」をそのまま信じて、「再び光武帝の時に設けられた」と解釈することは、事実誤認のもっとも思われないので、誤記であると考えざるを得ないのである。

(60) 後漢書・卷九〇・烏桓伝。



図版第一 浦佐、下山古墳の遠景と近景(1号墳)



図版第二 飯綱山古墳出土品  
 短甲 (1/10)、鏡 (1/2.5)、馬具・鈴 (1/4)、鈴 (1/2.5)